

聖祖の忠孝觀

松 木 秀 月

我國をば忠孝仁義の國と迄稱し、古來より忠者と云はれ、孝者と呼ぶるゝ者其の數を知らず、余今之れを宗祖に於て窺はんとす。

孔安國云、孝者人之高行也。と、孝經云、子云君子之事親孝、故忠可移其君と、之れ儒教の忠孝觀にして、親に孝するは人類萬行中の最高行、然して、親に孝するは君に忠なる所以なりと、能く斯くの如く説くと雖も、是れ未だ眞の忠孝とは云ふべからず。何んぞあれば、吾人の生命は只に今生一世に限られたるのには非らず、無始久遠の昔より、無終の未來まで始終不改の生命あり。然れば則ち、儒家所説の如く、君に忠し、親に孝すと雖も、今生一世に限られたらんには、其忠、其孝は始め無く、終り無く、畢竟夢中の化事に終らざるべからず、如斯ければ、儒家の忠孝は今生にて物質上に於ては、忠孝の幾分かを全うし得んも、

永遠に君親の靈を濟ふ事能はざれば、遂に有名無實の虚事たらずんばあらず。之れ宗祖の所謂

儒家の孝養は今生に限る、未來の父母や扶けざれば外典の聖賢は有名無實あり。外道は過未を知れども父母を扶くる道なし——父母を扶くる道なし況んや——佛道こそ、父母の後生を扶くれば、聖賢の名は有べけれ

と又

夫れ外典の孝經には、唯今生の孝のみを教へて、後生の行末を知らず、身の病をいやして、心の歎きをやめざるが如し
どの王ふ所以なり。

然るに、佛道に於て之れを見んか、爾前四十四年の中に於ては未だ十界互具相を知らず。

諸教諸佛自界二乗、二乗又不具菩薩界、如三界人天成佛望絶、不知二乗菩薩斷惑即是自身斷惑三乘四乘智慧雖似脫四惡趣互隔界々、而皆是一体也。(内三十四)

と、斯如皆是一体の十界互具の妙旨を知らず。故

に爾前教當分にありては、自身成佛得道する事能はず、況んや君親を扶くる事能はざらんや。然るに法華經に至つて二乗成佛、惡人女人の成佛顯はれて、始めて君と父母とを助くる事を得。故に宗祖の云く、此經は內典の孝經なり云云と、如斯く考へ來れば、内外典八千餘卷の中、唯法華經八卷廿八品のみ、眞に忠孝の教と云ふを得る、嗚呼尊い哉。

此の法華經を中心として立教し給へる、宗祖の忠孝觀や奈何に？宗祖や彼の建國二千有餘年の歴史に一大汚辱を遺したる承久の乱の翌年、即ち貞應元年、本化の上首上行菩薩の再誕として、我が扶桑國に應現し玉ひ、常に權教邪宗の猖獗を極め大義明文の癢れたるを歎かせられ、遂に法華經を中心として、乱麻の如き我國に統一を與へ以て大義明分を明らかならしめんとし玉へり。

然して當時に於ける僧侶と云はず、官民と云はず、舉て北條氏の權勢に之れ恐れ、之れ諂らふ時に當り、聲を大にして、

日本國に、代始てより、已に謀判の者廿六人、第一は△大山王子△第二大石の山丸△乃至第二十五人は△賴朝第二十六人は義時なり、二十四人は奉被責朝獄門に被首山野に晒骸、二人は奉傾王位國中を拳手云云（内二十二）

と叱せる者ありや、只我が聖祖のみ在して此大義を明らかにし玉ひしなり。

然して、其の孝道に至ては

釋尊は、孝養の人を世尊と名づけ玉へり。云云

（内三七）と又一切善根の中には、孝養父母は第一にて候なれば、まして法華經の行者にて、御座します、金の器に淨き水を入れたるがごとく、少しも漏るべからず、目出度し（外二）

と、然して單に筆に示し玉ふのみならず。建長五年開宗の際の如き、先づ父母をして眼前の利を捨て、以つて未來の大果を期せしめ玉へるごとき、又身延御入山の後と雖も、嶮阻極まる五十町の急阪を奥の院に登られ、東の方遙に父母の御墓の邊を眺めては暗涙に咽び玉ひ、追善の御讀經ありし如

き、舜は五十歳にして親を思ふと雖も、我祖は六十歳にして父母を戀ひ慕ひ玉ふに至つては、孝養の典型と云はずして奈ぞ!!於戲!!我國代始りてより忠者と云はれ孝者と呼ばるゝ者枚舉に遑非ずと雖も、眞の忠眞の孝に至つては、我祖に於て始めて之を見る事を得る耳。――完――

青年僧侶の自覺

菊 地 泰 旭

現代青年僧侶の、最も急務とする處のものは、青年僧侶が其自己の責任を自覺すると云ふ事である、現代青年僧侶の其行爲や、僧侶としての權威を見ず、俗青年と何等異なる所あきを奈何にせん虚榮名聞私利我欲、治に居て安を貪ばり、安に居て樂を欲し、樂を望んで放逸に流れ奢侈に耽る等實に言語も道斷なり、噫嗟吾人の双肩には幾萬貫の鐵塊の推戴せるを知らずや、吾人の責任は重且大あるぞ!

吾人に教ふる歴史は、只々過去の事蹟を知らしむる耳にあらず、將來の推移を默示し尙吾人をして自己の責任を自覺せしむるものである、宗祖上人御一生の血と力とを吾人は既に知る、宗祖が彼清澄山頂の宜言は、年正さに三十二才、三毒四魔討杖瓦石の御大難我不愛身命の其行爲、實に宗祖が『上行の再誕。末法の救世主。日本の柱乃至眼目』の御自覺に依る、此御自覺に依てかの迅風雷響天動地の大活動を作し得たのである、ナポレオンが年二十七にして良く伊太利を破り、赫赫たる戦功を異境に建てし、又三十四才遂に起て佛國皇帝の寶冠を戴きし、又西郷南洲が徳川氏末頃のかの危機一髪の秋に際し、能く一國の元氣となり一國の元動力となり、一國の生命となり、一國の血とあり力とあり得て、幾多の經綸を爲し幾百年閑息され居りし我國を遂に今日に至らしめし等は、皆是其自己の責任を自覺せるに依るものである、而して皆青年期に於て、各偉大なる働を作せり、宗祖に於て而かり、ナポレオンに於て而かり、南洲